



教育の質の維持・確保をめざした 校内人材育成の取組

～教育実習を活かした育成の工夫～

大分市立金池小学校 | 指導教諭 | 小畑 典子

I. はじめに

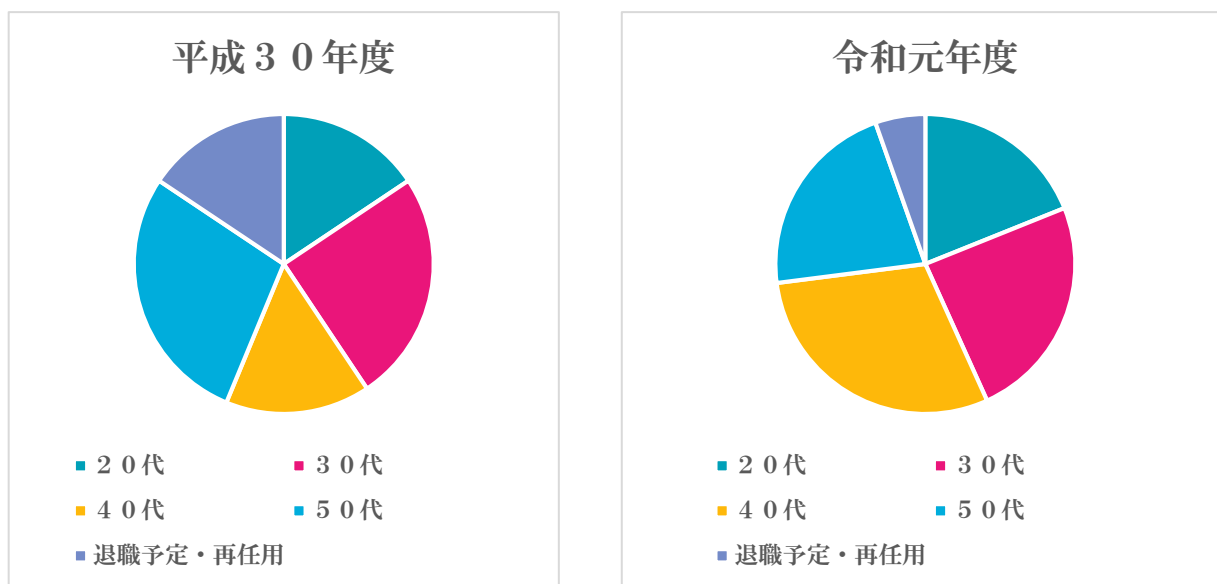
公立小学校教員の2019年度採用の倍率が全国で2.8倍、大分県では2.1倍となり過去最低だということが新聞報道された。学校現場では長時間労働、保護者対応等で苦勞が多いという印象があることが受験希望者の減少を招いているようだ。

本校でも、若手教員が児童の生活指導、保護者の対応に追われながら真摯に教育実践に向き合い、団塊世代後の教員にとっては、これまで経験のなかった学年・学校全体のリーダーとしての役割を担う現実がある。本校では10年近く、算数教育に取り組み学校全体で授業力向上を目指してきた。しかし、教員構成の大きな変化に直面し、これまでの取組成果を維持・確保していくことが喫緊の課題である。

そんな中、本校では大分市教育委員会から委託され、大分大学教育学部の学生を平成30年度から教育実習として受け入れることになった。公立学校として一度に多くの人数を受け入れることは、学校現場としても教員としても負担感と不安感がある状況であった。しかし、学校現場の様々な現実と課題を考えると、実習生と学校現場の教員や児童にとっても意義のある実習にすることは、近い将来の学校教育充実につながる試金石になるのではないのだろうかと考え、実践した。

II. 現状と課題

金池小学校はここ数年で、教員の半数以上が入れ替わっている。教員の年齢構成にも変化が見られ、50代以上のベテラン層の教員が減り始め、若年層・中堅層が増えてきた。そこで以下のような現状と課題が見られるようになった。



1. 教育力低下の懸念

(現状) 若手教員から、自分の授業への「授業の展開はどうすればよいか」「効果的な指導方法とは？」という相談が多く、日々の雑務・校務に追われる多忙感がなく精神的な余裕がない。

(課題) 教員として授業力を向上させるために、研修内容と実践がつながるような校内研修の実現と年齢や採用年数で行う一律の研修だけでなく、ニーズに応じた細やかな指導の必要性

2. 学校現場の多忙化と働き方改革

- (現状) 日々の雑務や様々な校務と生徒指導に時間を割くことが多く、負担感・疲弊感がある。その為、授業作り等に力を注ぐことができていない。その上で教育実習を受けることに心理的負担が大きい。
- (課題) 学校行事の精選を含めた、効果的かつ有意義な業務の削減や分担による負担感の削減

このような中での教育実習の受け入れは、新たな負担感を持たせる要因になりかねない。しかし未来の人材育成につながる教育実習であるからこそ、実習生にとっても教員にとっても、両者の中心にある児童にとってもよき学びの場にできないものかと思案し、実践を行った。

Ⅲ. 金池小での取組

1. 昨年度の取組を振り返って

平成30年度、金池小では19名の実習生を受け入れ、9クラスに配置した。概ね40代以上の学年長が主に担当教諭となった。長年のキャリアと経験をふまえた的確な指導は、実習生も担当教諭から多くのことを学ぶことができた。事後アンケートによると、「教育実習は実践的指導力を高めるために有効であったか」という問いに対し、95%の実習生が「有効であった・まあ有効であった」と回答している。担当教諭のアンケートからも「学生の姿に感動した」「こちらも勉強になった」等出され、実習を通して相互に成果も得られたが以下のような現状もできた。

◆指導案の主眼の書き方や評価についてはそれぞれの経験値によって指導されており、指導内容に差が見られる

◆学年長が担当教諭になると学生指導のための不在時間が多くなり、学年運営に支障をきたすことが起こりかねない。学年長の負担が大きくなっていた。

◆他のクラスでも授業記録をとるようにしていたが、学生への指導は担当教諭のみが行っていた。

1年目の実習を終え、残された現状から改めて教育実習の意義を考えた。実習生にとっては、生きた学校現場の理想と現実を見つめ、その中でやりがいをもって働く姿から教員の仕事の尊さを実感できる場となることが学校側にとっても理想である。私たち現場の教員も実習生の指導を通して、自分自身のキャリアを見つめなおすよいきっかけとなり「教育実習を通して、自己のキャリアを見つめ学び始める教員」としての姿を生み出すものであることと、本校の阿部校長のグランドデザインにある、『教員の人材育成』を踏まえて、金池小の教育実習を「人材育成の機会」としてとらえ、実践した取組は以下である。

2. 校内研究の転換

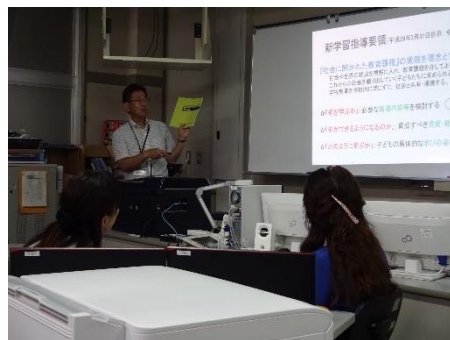
本校では算数科の研究を行い、その中心は「児童の興味関心を高め、意欲的に追及する子ども」の育成を目指した授業力向上であった。そのために教材研究や教具作成に力を入れ、児童にとって喜びのある授業作りであったことは言うまでもない。しかしながら上記の現状と課題、教育実習として指導することを考えると、児童のより実態に合わせた算数を学び合い、日々の授業に合わせた内容であることが必要である。また、学習指導要領の改訂に関わって「深い学び」の授業の仕組みを丁寧に理解し、実践していくことの重要性を考えた。幸いにも、教育実習担当と研究主任を兼任していたので実習と校内研修とを関連させながら運営していくが大事ではないかと考え計画した。

①指導案の主眼・評価の書き方への共通理解

主眼の到達度と評価規準の関連については、実習生を指導する際に大事にしたいポイントでもあり、指導する側にとっても見落としてはいけないものである。改めて指導案の作成について話し合う場はなかなか現場ではないので、確認する場を持ったことは日常の授業実践にも生きるものとなった。

②学習指導要領解説書の活用

指導案作成に関わり、学習指導要領の活用を提案した。校内研究において、算数科を中心に進めてきた金池小であるが、実践検証型研究を進めてきたこともあって、児童の学びの状況によって授業評価をする意識があまり見られなかった。教員同士が授業指導の場面で授業評価をするのではなく、つけたい力を明確にし、その手立てが有効であったかを児童の姿で評価することへ方向転換を図った。このような評価をするためには、授業におけるつけたい力をこちらがしっかりと把握し明確にする必要があり、学習指導要領や解説を読み込むことは必要不可欠である。校内研究においても、大分大学の川寄教授から新学習指導要領についての講話を頂き、内容について共通理解を図った。その後、校内に新学習指導要領の解説を全教科設置し、教員がいつでも手にとれるよう職員室に配置したり、校内研究においても必ず印刷したりして、学習指導要領に基づいた授業実践であるかという点検を心がけてきた。



③指導と評価の一体化について

学習指導要領解説書の理解・活用と共に、授業における指導と評価の一体化について校内研究の場で確認していった。校内研究を実践検証型から仮説検証型に変更し、授業における手立ての検証について、児童の姿を追っていくこととした。それは、授業はあくまでも児童に力をつけるために行うものであり、児童に学びが生まれなければ意味がない為、児童の変容を検証することが肝要であるという考えに基づいたものである。学生の授業においても、担当教諭と実習生の主観による授業評価ではなく、児童の姿や反応、学びの様子をもとに評



価することを提案し、事前指導を行っている。こうした授業の見方を再認知することは、現場の教員にとっても有意義であったと思われる。教育実習・校内研究共に変わってきたことの一番は、教員が授業を見るとき場所である。より児童の声が聞こえる・より表情が観察できる場所での記録をとる姿が見られるようになり、よい成果であったと思う。

④実習での学びの段階・事後評価

担任の仕事は、学習指導だけでなく生活指導・給食指導・清掃指導・・・と多岐に渡る。日々の実習生の指導において現場の教員と同じレベルで指導し、成果を求めることは難しいものである。「実習生にどこまで指導してよいのか」という疑問の声も多く上がっていることから、大分大学が作成した評価表と評価基準を事前に説明し、教育実習における目指す姿を全校で共通理解した。また4週間の教育実習の内容を週ごとに明確にし、実習生と指導する担当教員に共通の「学びのステップ」を提示し、その週ごとの取り組むべき内容や目指す姿を共通理解した。（＊資料1）

⑤実習生の授業観察後の指導の視点を設定

実習生は実習中1本の正式な指導案を作成するが、他の授業実践では板書型指導案を作成させ、授業に臨んでいる。この場合、授業構成における大事な要素が板書指導案に位置づけられているだけでなく、授業の中での児童への声かけや支援の状況がどうであったかも、授業の中の児童の姿を通して指導をしていきたいものである。ただ指導内容は多岐に渡るため、ある程度の絞った内容がある方がよいと考え、大分市教育委員会から出されている授業力自己評価表をもとに、項目を絞って以下のようなチェック表を作成した。

<授業観察チェックシート>

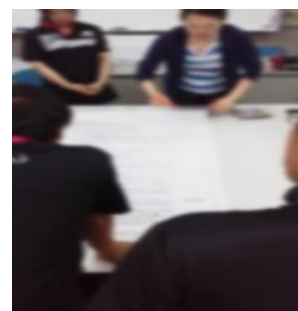
	チェック項目	評価
環境	学習しやすい環境整備（黒板はすっきりとしているか）	
	チョークの色づかいを考慮しているか（金池板書を参照）	
	活動の目的に合わせた座席の配置・活動形態を取り入れているか	
授業づくり	板書に「問い」「課題（深め）」「まとめ」「日記」等は位置づいているか。 *（「めあて」「課題」「まとめ」「ふりかえ」）	
	「課題」に呼応した「まとめ」となっているか	
	本時における評価規準（つけたい力）を把握しているか	
	支援を要する児童への手立てを講じているか	
	自分の考えを書く場面を設定しているか	* 自己決定
	対話的な交流場面を設定しているか	* 自己存在感
	互いの考えの良さや違いを認める場を設定しているか	* 共感的人間関係
	書く視点をもって、「日記」（振り返り）を書かせているか	
授業後	児童のよい学びの姿を価値づけしたか	
	児童の学習評価を適切に行ったか（評価場面・評価方法）	
	授業における自己の課題が把握できたか	

この観察チェックシートは、本校の校内研究における個人研の時などにも活用し、年間を通した普通の授業作りの視点としても活用してもらうよう提案した。

⑥教育実習前の金池 T—t i m e の活用

校内では人材育成の一環として、人材育成講座「金池 T—t i m e」を行っている。これは、それぞれの必要な学びに応じて講座を受講し、忙しい現場ではなかなか学べないことや聞けないことを、校内の先輩方が講師となり講座を実施するものである。対象は 10 年未満の教職経験者であるが、20 代から 50 代の先生方で希望する人が進んで受講し、共に学んでいる。先に述べたように、個々の経験値やキャリアは違いがあり、一律ではない。学生を指導することに関しても同様であると考えたため、教育実習を見据えた「授業作りのポイント講座」を私が講師となり、校内にて講座を開いた。内容としては授業作りについて、指導案作成のポイント、学生を指導する際のコツなどを実際の学習指導案を通して説明し、学ぶこととした。改めて指導案作成の手順等を確認した受講者からは、「もう一度自分の指導案を見直したい。」「これなら学生に指導ができそうだ。」との声が寄せられた。

＜指導案の見方＞



3. 指導時間の確保と心理的負担の軽減

実習期間中は、実習生が 1 日中ほぼ教室におり、授業記録をとっている。つまり指導の一部始終や発言が記録されていると思うと負担も大きく、授業が慎重になってしまう傾向にある。この傾向が良い働きをしていることもあり、「いつもより板書をしっかり計画してきた。」「自分の行動や発言について質問され、考えるよいきっかけになった。」などの発言も教員からはあったが、1 か月の実習指導と通常の担任業務を兼ねることは大変な負担である。そうした負担を少しでも減らすために、以下のように取り組んできた。

① 学校行事の精選と削減

教育実習中、担当教員の負担を減らすために最も必要なことは時間の確保である。通常の校内研修や学校行事をそのまま行っていると、指導時間が負担となってくる。働き方改革が叫ばれる中で、可能な限り効率化を図り、「人材育成としての教育実習」を運営していきたいと考えた。その為には、管理職の先生方の理解・協力が必要である。初年度の教育実習の受け入れ時では、管理職の先生方へ実習中のスケジュール提案と時間の確保をお願いし、教員への負担を減らすための方策を承認して頂き、計画的な会議の実施と削減を実行することができた。今年度は初めに教育実習の具体と状況・課題を説明し、「人材育成」と校内研修との連携を踏まえた構想を提案した。職員の健康を守りつつ、より質の高い教育実習を運営するための会議等の削減と研修の連携を実行することができた。管理職の先生方の深い御理解があつての教育実習運営ができていることに間違いはないと実感している。

② 担当教諭の選定

先に述べたように、学年長を中心としたベテラン層の指導は、実習生にとって参考となる指導を受けることが出来る。しかし、本来の業務である担当学年の運営も請け負っている為、かなりの負担をかけてしまってい

た。そこで2年目の教育実習では、「人材育成」という視点から、採用3年以上で学年長ではない若年層に担当教員を配置した。その理由としては、

- ◇学年長が実習担当をしていないと、実習期間中も学年主任を中心の学年運営を機能的・効率的に行うことができる
- ◇若年層の教員にとって、実習生の指導により、自己の授業スキルをアウトプットする場面が生じ、学びのキャリアを実感したり、自己の学級経営や授業経営の成果と課題を実感したりすることができ、自分の学ぶべき方向性のビジョンをもつ機会となる
- ◇5年後、教育現場における若年層の教員が多くなる中で、「指導する」という経験が同じ職場内で次世代の教員を育成する力を担保することにつながる

と考えてのことである。ただし、現場の状況はその時々で変わるため、若年層ばかりが担当することができなかった。その学年には負担をかけてしまったが、学年長が担当を外れた学年では、担当教員の学年の仕事の分担の削減や配慮を行い、負担軽減に努めることができた。

(担当教諭の年齢構成) 平成30年度

40代 3名 50代 6名

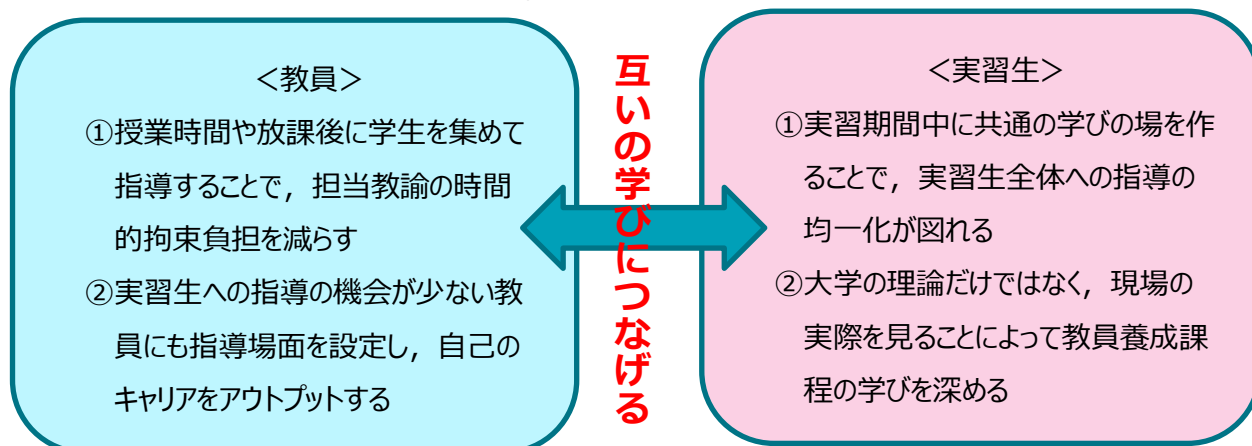
令和元年度 20代 3名 30代 3名 40代 4名

③ 教育実習生への授業公開・指導の分散化

金池小では、9月1ヵ月間の週案を夏休み中に作成している。これは実習生の授業回数の確保と、授業記録の時間を確実な実施がねらいであるが、担当教諭の負担軽減もできるようにするものでもある。また9月には水泳指導が行われ、学校行事等も多く予定されていることから、計画的な実習運営は、一人一人の教員が指導を担うためにも必要不可欠となる。この計画における担当教諭の負担軽減への取組は以下のものである。

ア) 実習期間中の実習生が参加する金池T—timeの設定

教育実習期間中では校内の専科担当教員・実習担当者以外の教員による公開授業、特別支援教員による学校における特別支援教育の実践、生徒指導主任による生活指導について等の講座を開き、担当教員が講師となって講座を開いた。これは、以下のようなねらいがある。



学生対象ではあったが、金池 T— t i m e の特性上、希望があれば本校の学びたい教員も参加し、学生・教員が一緒になって学ぶ場を実現することができた。授業公開や講座をした教員からも「もう一度自分の仕事を整理して学び直した」「学生に話す時、緊張したが、自分の指導を言語化することで振り返りもできた」との言葉を聞くことが出来た。中でも現役教員との座談会では、実際に働いている教員の生活や実際の悩みなどを共有したり、学生からの仕事への質問を受けたりするなど、有意義な時間となった。学生にとって、身近な教員の具体的な仕事について話を聞くことは進路選択の良い材料になったようだ。教員・実習生共に互いの学びにつながる場となったと手ごたえを感じている。

＜理科授業公開＞



＜特別支援教育の実際＞



＜生活指導について＞



＜現役教員との座談会＞



イ) ペアクラスの設定・他クラスへの授業観察・給食指導の実施

昨年度は 1 ヶ月の週案を作成する際、学年部の他クラスへの記録を伴う授業観察や実習生による給食支援を計画的に位置づけ、学年部の中で実習生への対応スケジュールを共通理解した。実習担当教員外の同学年のクラスで、概ね平均 5 回程度の授業観察を行うことができ、実習生が担当クラスのみにいることはなくなり、担当教諭の心理的負担を軽減することができた。

そこで今年度は、さらに「ペアクラス」を設定し 主に 2 クラスの授業観察や給食支援をしながら、指導の分散を図った。このペアクラスは、若年層の教員であればベテラン層の教員と、ベテランの教員であれば若年層の教員とで設定されたものである。実習生にとっても、同じ授業場面でもクラスや児童の状況によって指導方法・授業展開を変えていることに気づくことができ、児童の実態を大事にしなければよい授業作りができないことを

理解することができた。授業後はその教員から直接授業について指導を受ける場面もあり、指導の内容に広がりを持たせることができたといえる。



Ⅳ 成果と課題

1. 校内研究の転換

○指導案作成にあたって、指導のポイントを把握し、実習生に適切な指導が実現できたことと合わせ、本校の教員にとっても自己の指導案作りの視点等としても活かせるようになったと思われる。

▲評価の面においては、学習指導要領解説書の解釈がまだ十分ではなく、一般化できていない面もある。今後も校内研究を通して、児童につけたい力を明確にし、そのための手立てや評価の在り方を継続して研修し、さらに考えていきたい。

2. 指導時間の確保と心理的負担軽減

○ペアクラスの導入や他クラスへの参観を多く取り入れたため、実習生にとっては、担当教諭員のみの指導とならず、他の教員からも指導を受けることができた。また、若年層の教員を中心に不安感・負担感は少し解消されたといえる。

○実習生を学年・学校全体で指導するという意識も広がり、学年内の担当教員への業務負担を減らすための配慮をすることができた。

▲放課後の実習生との指導時間は、実習生にとっては授業実践や日常の活動を振り返り、指導を受ける有意義な場であったが、教員にとっては放課後の時間を実習生に充てることによって、他の業務が積み残され過重な負担となっていた。放課後の行事等の削減は実施できたが、担当教員の負担が大きいことは残る課題である。（＊資料２）

Ⅴ おわりに

金池小に指導教諭として赴任し、教育実習を担当して２年目が終わった。当初は教員にとって負担感・不安感しか持てない教育実習の導入であったが、今年度学習・生活の指導について改めて共通理解し、金池小チームとしてより質の高い教育実習に向けて準備をしてきた。実習最終日に、実習生から「教師になりたいと思っていたが、金池の実習を通して、さらに思いが強くなった。必ず教師になります。」というコメントをもらった。実習生の教員への希望が高まりと、成長の姿が見られたことは実習担当、受け入れた金池小として大きな喜びである。同時に教員一人一人の指導力向上や学年・学校のつながり・まとまり、そして教育実践を進める意識の高まりを感じ、本校の教職員の協力に感謝の気持ちが込み上げている。

最後に、教育実習と校内研究の連携した運営を温かく指導・助言して下さった本校の管理職の先生方、そして大学の担当教授の皆様にも厚く感謝を申し上げたい。

VI 貼付資料

(資料 1) 教育実習の学びのステップ (学生用)

＊ 4 週間の実習の中で、みなさんに取り組んでもらいたい目標や視点を週ごとに書いています。
必ずしもこの通りにではなく、各自の課題に合わせて週ごとの目標づくりに活用し、自己の課題解決に向けての参考にしてください。（○は大きな目標 ・そのために取り組むこと）

週	授業づくり	子どもとの関わり
第一週目	○授業の構成、学級における指導の工夫等を見取り、自己の目標や課題設定をする ・ 授業記録をとり、子ども中心に分析 ・ 1 時間の授業におけるつけたい力を把握しそのための手立てを見取る（授業を見る視点を参考に） ・ 簡易的な授業において授業づくりを行い実際の板書・子どもとのやりとりなどを体験する。⇒課題をつかむ	○担当学級の学級経営の様子を見て、1 日の生活の流れや子ども様子を把握する。 ・ 日常的な生活指導（あいさつ・トイレのスリッパ・掃除等）を観察し、子どもの実態（課題）を把握する。⇒課題をつかむ ・ 子ども名前を覚え、毎日全員の児童と会話できるように意識して声かけし信頼関係をきづく。休み時間は積極的に遊ぶ。 ・ 宿題チェック、給食指導を行う
第二週目	○新大分スタンダードを目指した授業づくりを行う ・ 「めあて」と「ふりかえり」を意識した構成構造的な板書 ・ 本時のつけたい力と評価規準を意識する ・ 授業記録から自己の授業に活かしたいことをみとり、次週の授業実践へ取り入れる	○半日担任業務を行い、1 日の生活の流れを把握し、必要な指導をする ・ 担任として必要な指導を行い、振り返りの中から自己の課題を把握する ・ 生活指導上必要と思われることは、子どもに指導（価値づけ・注意）・支援を行う ・ 児童の指導、引率等を積極的に行う
第三週目	○大学で作成してきた指導案を中心に、子どもと一体感のある授業実践をする ・ 「めあて」「課題」「まとめ」「ふりかえり」のある授業 ・ 子どもの発言を活かした授業づくり ・ 評価規準をもとに、授業の振り返り ・ 1 週目からの自己の授業実践を振り返り、最終授業に向けての教材研究・準備	○1 日担任業務を行い、担任として必要な指導をする ・ 子どもの生活行動を適切に判断し、担任として必要な指導（価値づけ・注意）・支援を行う ・ 他の学年・学級における生活指導・学級経営の工夫を探しておく ・ 児童の困りに応じた指導を考え実践する
第四週目	○自己の課題解決に応じた授業づくりを行い、大学でのこれからの学ぶべきことを知る ・ 自己の課題を明確にし、その解決にあたる授業を行う ・ 四週間の授業実践を通して、自己の目指す授業像を明らかにする	○実習終了に向けて、子どもとのかかわり方を振り返り、担任として子どもたちに伝えるべきことを考え、話す場をつくる ・ 担当学級だけでなく、他のクラスも含めた子どもたちとの最後の交流をする ・ 担当クラスの子どもの自分の指導・支援の成果と課題をまとめる ・ 担任として大事なことをまとめる

教育実習における指導のステップ（担当用）

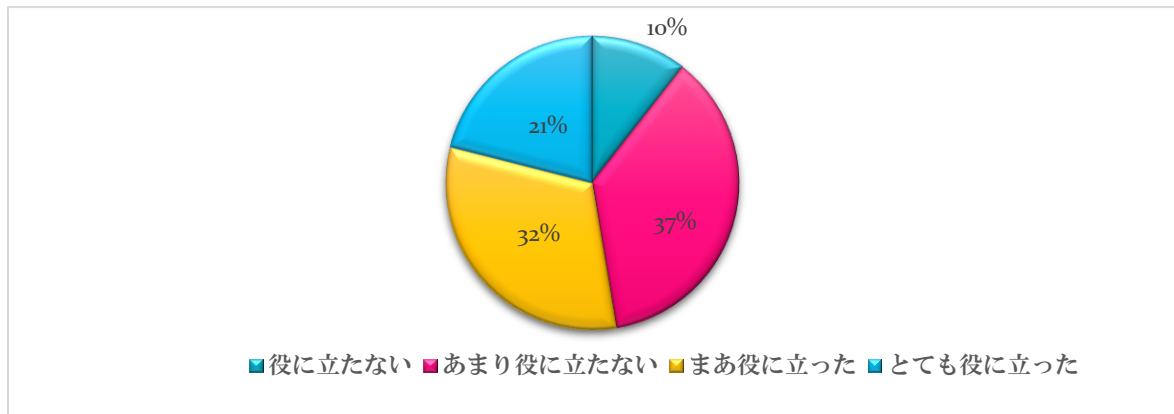
＊4週間の実習の中で具体的な指導内容を提案します。この通りでなく、学生の実態に合わせてご指導ください。

週	授業づくり	子どもとの関わり
第一週目	○授業の構成、学級における指導の工夫等を見取り、自己の目標や課題設定させる ・授業記録から分析をさせ、授業に対する質問等をうける ・1時間の授業におけるつきたい力と手立ての関係を指導する ・基本的な言葉遣い、板書、態度等について気になることを指導 ・低学力層の児童の存在についても話題にする	○担当学級の学級経営の様子を見て、1日の生活の流れや子ども様子を把握させる ・日常的な生活指導（あいさつ・トイレのスリッパ・掃除等）の仕方を伝える ・子ども各自の課題を共有し、指導の方向性を指導する ・宿題チェックの仕方や、給食指導の仕方を指導する⇒実際に行わせる ・教室環境の整備について一緒に作業する
第二週目	○新大分スタンダードを目指した授業づくりを指導する ・「めあて」と「ふりかえり」との関連 ・構造的な板書のありかた ・本時のつきたい力と評価規準の関連 ・授業記録をもとに成果と課題を提示 ・教材教具についてのアドバイス等	○半日担任業務を行い、1日の生活の流れを把握し、必要な指導をする ・担任として必要な指導を、振り返りの中で指摘 ・子どもへの指導（価値づけ・注意）・支援をについて適切であったか指導 ・児童の指導、引率等を積極的に行うことを指導
第三週目	○大学で作成してきた指導案を中心に、子ども中心に据えた授業作りを指導する ・「めあて」「課題」「まとめ」「ふりかえり」のある授業となっていたか ・子どもの発言の活かし方 ・評価規準をもとに、授業の振り返り ・1週目からの授業実践の変化を知らせ、最終週の課題を明確にする	○1日担任業務を行い、担任として必要な指導をする ・他の学年・学級における生活指導・学級経営の意図や工夫を教える ・児童の困りに応じた指導を考えさせ具体的事例を提案 ・具体的な生活場面（子どものケンカ等）での事例から指導実践を教える
第四週目	○自己の課題解決に応じた授業づくりを行い、大学でのこれからの学すべきことを理解させる ・授業者の課題を明確にした上で、その授業が課題解決となっていたか指導助言 ・四週間の授業実践を通して、実習生自身の授業実践の変化を価値づけし、成長を実感させる	○実習終了に向けて、子どもとのかかわり方を振り返り、担任として子どもたちに伝えるべきことを考え、積極的な指導の場をつくる ・担当クラス子どもへの実習生の指導・支援の成果と課題をまとめる ・大学に戻ってからの課題を話題にする ・（自分の）担任として大事なことを伝える ・教師としての仕事のやりがいや課題等も話題にできるとよい

(資料2) 金池小学校 教育実習振り返り(一部抜粋) 円グラフは学生の回答によるもの

左枠 学生の意見 右枠 教員の意見

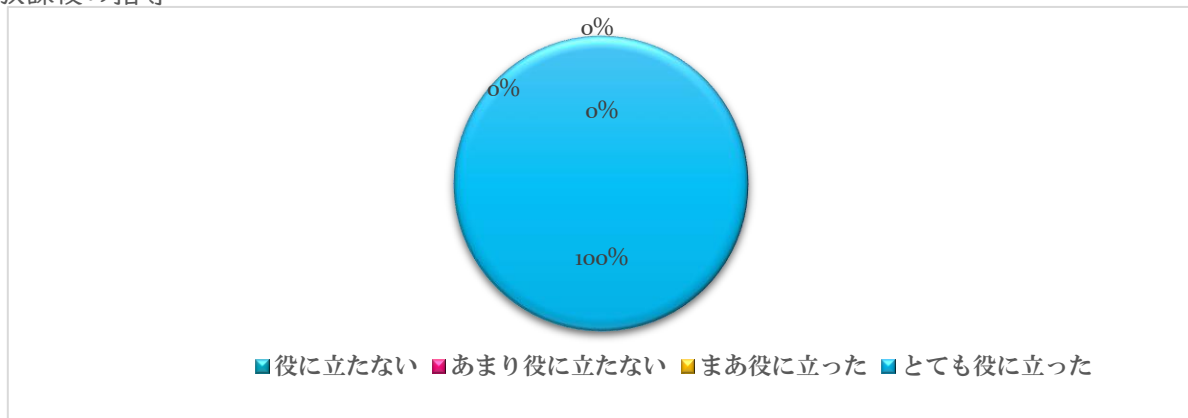
○大学での指導案作成・教材研究



- ・単元の大枠を作るという点では良かった。
- ・子どもに合わせて、練り直し・色々な案を考えることが出来てよかった。
- ・基本的な作り方の役に立った。そのおかげで授業づくりもスムーズなりとても役立った。
- ・代表授業を行うということもあり、早い段階から指導案を考えることができ、授業でおさえない点を児童の実態に合わせて変更することが円滑に行えた。
- △公立小学校では少し作り方に異なる部分も見られた。
- △事前に考えて作成した指導案と実際にやるところでは少しずれがあった。
- △実際に児童の様子・実態を把握せずに作るのは難しかった。(複数回答) せっかく大学の先生に指導してもらったのに、作り直しとなってしまったのが申し訳なかった。
- △学年の先生の意見を事前に聞いておきたかった。
- △学校ごとに進度と進め方・内容が違うので、結局考えてきたものが役に立たない。担当の先生にも気をつかわせる。
- △学校ごとのルールを事前にしておきたかった。指導案作成は学校ごとでいいのではないか。
- △附属の学生と一緒に作成することで、それぞれの考え方のギャップを感じた。しかし、1単元の見通しをもった指導案作成ができたことは良い経験だった。
- △時間のゆとりを持ちながら作成できたのが、各学校のやり方に合致しないもの、児童の実態がつかめていないものができた。
- △実際の学校現場の先生に指導案を見てもらうと、ほとんどの内容を修正することになり、大学の先生からの指導を役立てられなかった。
- △全く別の指導案になった。事前に作る意味はなく他校と合わせる必要もないと思う。学年部でどうするか決めておく時間があればいいと感じた。

- ・ある程度の指導計画はできていて、スムーズに入れた。
- ・とてもよく努力されているなど勉強になりました。
- △教材研究・指導計画など準備してきたが、**本時案の形式がある程度学校の枠に近いと事前研の時間が短縮できそう**だ。
- △児童の具体的な様子や動きについて、かなり修正を必要とした。
- △子どもの実態とは合わない指導案もあったので一緒に作った。

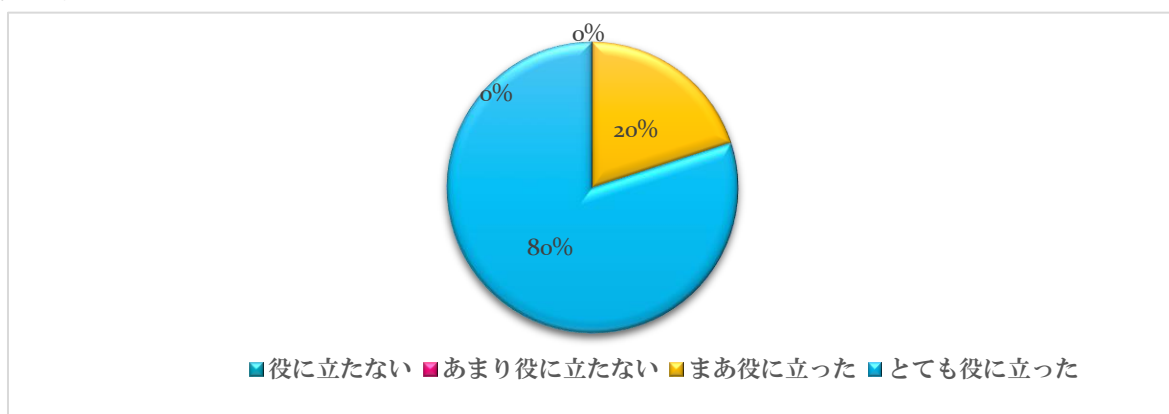
○. 放課後の指導



- ・児童に関して相談したり, 授業の評価を頂いたり, 話しやすい環境で聞きたいことがなんでも聞けた。貴重な時間だった。(複数回答)
- ・現場の先生から様々な視点でとても丁寧に指導してもらえたのでよかった。(複数回答)
- ・大変親身になって指導していただいてありがたかった。また事後の自分に役立つことが多かった。(複数回答)
- ・担当の日の先生の負担にはなってしまいましたが, 本当に助かりました。ありがとうございました。
- ・1日の中で気になったことや困ったこと分からなかったことなど色々なことのアドバイスや助言をして頂いた。指導案に関しても一緒によりよい方法を教えてくれたり行き詰ったところに助言していただいた。先生のやり方も聞くことができた。
- ・1日の振り返りはとても大事である。実践した授業はどうだったのかの反省, 児童のトラブルの連絡・報告・相談など様々な情報を交換する場であった。また自分を見つめなおす時間でもあった。有意義な時間であった。(複数回答)
- ・公立ならではの事例や子どもへの対応の方法を学ぶことができたため。
- ・その日の授業への指摘をもらうこともできたし, 細やかな話もできた。
- ・日中は話す時間がないため, 放課後の指導は助かった。
- ・一日の反省として授業実践のフィードバックから, 次の課題をつかむことができた。
- ・その日の出来事を報告し合うことで, わたし一人では見えてこない子どもの姿を知ることができた。
- ・短時間で的確に指導していただいて, ゆっくり休みながらもとても実りの多い実習になった。

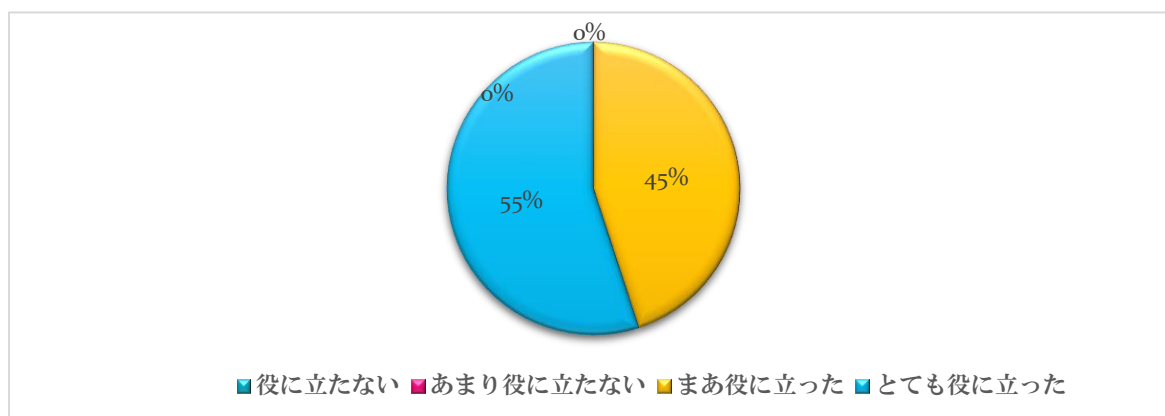
- ・学生の指導をしている間に, 学年の仕事をしていていた時は大変助かった。放課後は, 学年の仕事→学級・個人の仕事という気持ちでいてくれるとありがたい。
- △放課後の時間がとられるので, 担任としての実務ができず, 持ち帰りや週末になってしまう日々であった。
- △指導時間が長くなりがちなので, 時間設定を明確にもらえるとうい。
- △教育実習受け入れは, 日常の業務外のことなので, 放課後の指導時間の確保のために配慮・削減してほしい。

○代表授業研

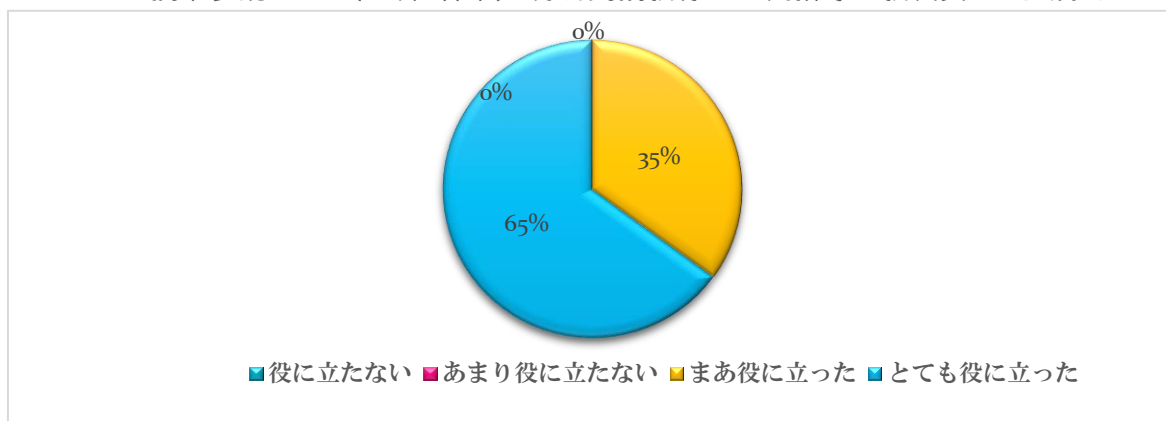


・学年部の先生方から多くの助言を頂き授業時に活かすことができた。沢山の学びがあった。貴重な時間。(複数回答) ・自分の一人の反省では気づかなかった点を指摘し、具体的にどうすればいいかを一緒に考えて頂いた。 ・授業をしていなくても大変役に立った。 ・一つの授業を深く考えて行うという経験が無かったので色々な視点から意見が出て視野が広がった。 ・1時間の授業の中にどんな風につくればいいのかをみんなで何度も考えるので考えを深めたり、教材研究につながった。 ・1つの授業をつくる難しさを感じたいい機会だった。 ・指導案や文の書き方や実習生にはない先生の視点とはどのようなものを学ぶことができた。 ・緊張感をもって取り組むことができた。(複数回答) ・教材研究の仕方を学べた。	・とてもよくがんばり、大学生とは思えないほど堂々としていた。 ・良かった。いい授業だった(複数回答) ・二人とも教材準備や研究を熱心に頑張っていたと思う。 ・事後研は学年部や校長先生からもたくさん意見をもらえて勉強になったようだった。(事後研のKJ法も良い) ・川寄先生のお話は私たちも勉強になった。 △事前研の時間確保
--	---

○ペアクラスの設定



・より多くの児童と接し、関わることは大きな学びにつながった。しかし、給食指導に関してはクラスによってやり方が大きく異なり戸惑うことも多かった。(複数回答) ・自分の入ったクラスと全然雰囲気が違うクラスに入ること、臨機応変に対応することの大切さを学んだ。慣れた子どもたち以外の子どもたちの前で堂々と指導することやしっかり声かけを行うことができるという経験ができてよかった。 ・いつもと違うクラスでの実践は、同じ手立てでもうまくいかないこともあり、色々な方法を学ぶことができた。(複数回答) ・他のクラスでの学級経営や指導についてみることで、様々なやり方を知ることができたため。 ・児童の実態によって授業展開が変わるということに気づけた。ペアクラスのきまりなどをよく知ることができず、あまり積極的な指導をすることができなかった。 ・難しくもあり、楽しくもあった。 ・他クラスとの交流を深めることができた。 ・給食以外あまり接点がなかったため、数人とししか触れ合えなかった。	・良かった(助かった)。(複数回答) 色々なクラスを見れて学生も喜んでいて。 ・ペアクラスがあった方が二人の実習生が6回もの授業をこなすためには必要だった。 ・指導面においてもペアクラスの先生方にも入ってもらうことで、不安が解消されたこともあった。 △時間のズレの調節は難しい △他学級の観察はもう少しさせてあげたかった。 △諸事情でうまく実施できないこともあったが、給食の補助だけでも行けてよかった。
---	--



- ・今教育現場にいるからこそ、普段の大学での講義よりも理解しやすく、自分の力になった。（複数回答）
- ・実践がすぐできる状況であるため、新しい知識を学ぶ時間で同時に必要だと思う。
- ・現場の先生方に、現場のことを聞けたのはよかった。（複数回答）生徒指導については、もう少し早く聞けたらより一層学びになったと思う。
- ・特別支援教育と生徒指導については大学の学びのよい振り返りになった。学校でしかきけないことを聞いてみたかった。
- ・現場で働いている先生の経験に基づく話や、リアルな話を聞くことが出来てよかった。（複数回答）副免で特支をとって、講義で学んだことはあったが、実際に教室の工夫等を見ることが出来てよかった。他を知ることができた。
- ・特別支援に関わる内容では、実際に教室を観察し、それぞれの道具や配置についてなぜそうしているのかよく理解できた。
- ・なかなか学べないことも学べる。また教職員も参加するため、常に学ぶ姿勢という教職員にとって必要不可欠な態度も見られ良いと思った。
- ・先生方のプライベートについて知ることができ面白かった。
- ・座談会で多くの先生方と楽しく色々なことを話し合えたため。
- ・座談会がとても楽しかったです。（複数回答）
- ・いくつかの内容において勉強につながることが多々あった。現役の先生として参加することができたら、さらに良い時間になるだろうと感じた。
- ・現役の先生方のリアルな声がきけた。時間がもう少しほしいくらい充実していました。

- ・座談会の時期は早い方が良い（早く仲良くなれる）後半がよい（話題が増える）

（担当教諭からのコメント） 担当教諭 10 名のうち 5 名の回答（他は無回答・別回答）

- ・大変なこともたくさんありましたが、勉強になること、助けてもらったこともたくさんあり、有意義な一か月でした。（40 代）
- ・相談にのってもらいありがとうございました。勉強になりました。（30 代）
- ・自分の授業を見つめなおしたとてもよい機会となりました。指導する立場のため、授業準備（教材研究）も頑張ったつもりです。楽しさと同時に担任としての振る舞い、授業を見られるプレッシャーがよい刺激となり勉強になりました。来年も持ちたいです。若手に持たせるのは正解（いい勉強になる）だったかと思いました。（20 代）
- ・自分の指導で十分な指導ができたのか、この指導でいいのかと悩むこともありましたが、ペアクラスなどの活用で学生に色々な先生方に指導していただいたことで、自分自身も勉強になりました。（20 代）
- ・年が近かったのも、自分には何が伝えられるかなと悩みました。近いからこそ伝えられることもあったかなと思います。私もクラスの子どもたちもいい経験ができた一か月でした。（20 代）